

ハイデルベルク信仰問答より

問 60 あなたは、神の御前で、どのようにして義となるのですか。

答え ただ、イエス・キリストにある真の信仰によるだけであります（ローマ 3:21-22）。

私の良心が自分は神のあらゆる戒めに対して、はなはだしく罪を犯し、その一つだに守らなかったといい（ローマ 3:9-10）、私がますます、いつまでも、あらゆる悪に傾く傾向がある（ローマ 7:23）といて、私を責めるにもかかわらず、神は私自身の何の功績もなしに（テトス 3:5）、純粹の恵みによって（エペソ 2:8）、キリストの完全な償いの益を私に与え（Iヨハネ 2:1-2）、あたかも私が、決して、ただ一つの罪を犯したこともなく、かつて罪深かったこともなかったかのように、その義と聖を私に与え（ローマ 4:3-5）、もし、私がただ真に信じる心をもって、これらの恵みを受けるなら（ローマ 3:24-25）、キリストが私のためにもたらしてくださったすべての服従を、私自身に満たしてくださる（ローマ 4:24）のであります。

本問答で「義認」の教理が扱われていることは明らかですが、重要なのは「義となるための道」を信者がいつでも答えられるべきであるということでしょう。「手段」ではなく「道」という言葉を用いたのは、それが私たちの力によって得られるものではなく、用意された通路を通る以外にないからです。

「義となる」というストレートな表現にも注目しましょう。「義とされる」「義と認められる」という言い方がなされることが多いところ、ここでは敢えて「義となる」と言われています。私たちが神の御前で義そのものとなってしまふ。これはどういうことなのでしょう。おそらくイメージとしては、私たちの心に福音の種が蒔かれ、そこから芽が出て生長し、その新しい生命体が私たち自身の人格となって生き始めるということでしょう。そして、私たちは義の樹となり、義の実を結ぶようになる。私たちの内に宿ったキリストの義がそのように働きかけるのです。

「答え」の部分を見てまいりましょう。まず冒頭で「イエス・キリストにある真の信仰による」と言われています。救いの要は主イエスであって、他の何者でもありません。この方を信じることにより、人は聖なる神の御前で義となるのです。しかし、如何なる存在が義とされるのか、その著しいギャップを知ることが重要です。著者は、義となり得ないはずの人間の状態を徹底的に追求していきます。

「私の良心が自分は神のあらゆる戒めに対して、はなはだしく罪を犯し、その一つだに守らなかった」。まず、自分には良心の咎めがあるということを告白します。心に書き記された律法は、ある程度の善悪の判断力を与えますが、正しい道を選び取ることに失敗し続けてきた自分があることを、誰もが知っているはず。更に、聖書に書き記された神の

御心を知るときに、それが実は神に対する罪であったことを知るようになります。

「私ますます、いつまでも、あらゆる悪に傾く傾向があるといって、私を責める」。「ますます」「いつまでも」「あらゆる」と、誘惑にどこまでも引き摺られていく可能性のある自分を認めています。自らの心を省みるとき、あらゆる領域で罪への誘いがあり、それに必死で抵抗しようとする自分、罪を愛してしまう自分、罪を犯しては自己嫌悪に陥る自分がいることを認めずにはおられないでしょう。

「にもかかわらず、神は私自身の何の功績もなしに（テトス 3:5）、純粹の恵みによって（エペソ 2:8）、キリストの完全な償いの益を私に与え」。「にもかかわらず」という接続詞が重要なのです。私たちが如何なる黒い心を持っていたとしても、「しかし」神の恵みはそのような者を全き光としてくださる。私が神に対して何か正しいことをしたからではなく、キリストが全うしてくださった十字架による罪の償いを、神は価なしに与えてくださいました。ここでも「益」という言葉が出てきましたが、主イエスの十字架は確かに私たちの人生を根本から造り変え、この恵みを受け取るところには何一つ損はないのです。

「あたかも私が、決して、ただ一つの罪を犯したこともなく、かつて罪深かったこともなかったかのように、その義と聖を私に与え」。この大胆な表現はすごいですね。キリストの「義と聖」は、私たちがまるで一度も罪を犯したことがないと神が認めざるを得ないほどの絶大な効力を持って働くというのです。キリストの御業の完全性を侮ってはなりません。

「もし、私がただ真に信じる心をもって、これらの恵みを受けるなら、キリストが私のためにもたらしてくださったすべての服従を、私自身に満たしてくださる」。最後のポイントは「神に対するキリストの服従」でしょう。主イエスが父なる神様に対して果たされた服従とは何でしょうか。それは、神の戒めのすべて、神との契約のすべてを業において全うされたということです。「業の契約」ということばを思い起こしていただきたいと思いますが、これは神とアダムが最初に結んだ契約でした。アダムには神との約束事を「業」において守り通す責任があったのです。神は彼の「業」を見て、彼が従順であるか、正しい者であるかを判断されました。アダムは瞬く間にこのテストに敗れ、業の契約は破綻となりました。主イエスは「第二のアダム」として世に生まれ、アダムをはじめとするすべての人間が守れなかった「業の契約」をパーフェクトに全うしてくださったのです。

キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。（ピリピ2:6-8）

私たちは義とされるために何もしていません。主イエスが用意してくださった「義の道」を歩けばいいのです。最も安全な道、最も確実な道です。主イエスが先頭に立って導いてくださっていますから、その背中をしっかりと見て歩んでまいりましょう。信じて着いて行けば、その先で両手を広げて待っておられる父なる神様とお出合いできるはずですよ。その時、私たちは「義である」とされ、地上で犯した如何なる罪も見出されることはないでしょう。それは、私たちが主イエスと一緒にいるからであります。